

令和2年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 1 －
重点項目	学力の向上	
重点課題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数 各教科 年間2回以上	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合（学習アンケートによる数字） 80%以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○教師が常に自己研修に励み、担任や教科担当者による個別指導の充実に努める。 ○個々の学力に応じた教材について、研究開発をさらに進める。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。
達成度	○互見授業については1学期には行うことができず、2学期のみ行った。 ○教科別授業研究会は各教科2回以上行い、今年度の指導について検討したり、生徒の学習実態について分析したりし、指導法の改善策をはかった。	○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒86% ○「テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている」と答えた生徒70%（見直しの結果は1月のもの）
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 1学期は5月末まで休校であり、互見授業は行わなかった。休校期間中は学年で課題・解答を郵送したり、ホームページを活用し、こまめに指示を与えた。また、G-Suite for Education (Google) を用い、教科書の内容に関し、収録動画の配信（オンデマンド）や解説・解答等のPDFの配信を行い、質問等にも対応した。 G-Suiteに関しては各教科において4月中にどのように用いるのが効果的かを話し合い、1学期終了時には利用方法について評価を行った。 2学期は各教科で互見授業を実施し、授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・定期考査、実力テストの後は、解き直しプリントを提出させている。再テスト、補習も実施している。定期考査等の既習範囲の問題を課題とし、復習させている。(数学) ・定期考査、実力テストのたびに、テストの見直しシートを提出させている。日頃の小テストを徹底し、直しを提出させたり、再テストを行ったりした。(英語) ・定期考査、実力テスト後の授業で、ポイントとなる問題について講評や解説を行った。国語通信を定期的に発行し、計画的に学習できるように授業・考査範囲を早めに連絡したり、課題への有効な取り組み方を示したりしている。(国語) ・長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画書の提出を休み前後で徹底し、担任面接でアドバイスを行った。数学は課題チェック表を用意し、計画を立てさせた。	
	2年 ・考査、模試の終了後に、振り返りシートや解き直しプリントを配布し、取り組ませた。 ・第4回、第5回実力テスト終了後に解説授業を2時間行い、テストの見直しを促した。 ・行事予定やカレンダーを配布し、先々の見直しをもって学習計画を立てるよう指導した。 ・国語・数学・英語を中心に各外部模試や実力テスト向けに事前対策学習課題に取り組みせ、事前準備の方向性や必要性を明確にしている。 ・2学期以降、国語と英語、数学で添削指導（希望者）を行い、自主的な学習を促した。 ・長期休業前と終了後の面接を通して、学習計画とその取り組み状況を自己評価させた。	
	3年 ・新型コロナ流行による休校期間の授業時間不足を補うために、6月から7月の期間に7時間日特別授業を行い。授業進度の確保を行った。2学期前には進度不足分を解消できた。 ・各進学模試終了後、『模試解説授業』を2～3時間行い、問題設定の狙い、解法の解説を行いテストの見直しを図った。また教科によっては休校期間中授業補填をこの時間を使って行った。 ・1学期末考査終了後、大学別学習ガイダンスを行い、長期休業中に効果的な学習ができるように指導をした。7月、9月～11月に難関大講座等の特別講座を設け、学習支援を行った。 ・生徒の学力を学年会議において定期的に分析し、強化・補強を図った。担任による個人面接、教科担当による教科面接を行い、個々の現状に応じた助言をした。	
評価	B	《互見授業・教科別授業研究会》 各教科において2回以上の教科別授業研究会が実施され、その概要が報告されており、生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。互見授業においては、できる範囲で行われており、授業改善につながっている。
	B	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・テスト後の見直しをしている教科は、数学(約75%)が3教科中最も高かった。できなかった分野を自主学習に取り入れている教科についても、数学が高かった。見直しできなかった理由として、次の課題や予習に時間をとられ十分に時間がとれないと感じている生徒の割合が高かった。今後もPDCAサイクルの確立を訴えていく必要がある。 2年 ・「定期考査や実力テスト終了後、できなかった問題をどうしていますか」という設問に対して、国語以外は「一通り見直ししたり、解き直ししたりしている」割合が過年度と比較して大幅に伸びており、全体としては復習の習慣が定着していることがわかる。 ・地歴、理科への見直しの意識が高く、その後の学習計画に取り入れている生徒の割合も高い。 3年 ・「テストを見直す意識が強くなった」または「強くなった教科もある」生徒の割合は90%（昨年度88%）、「進学模試後の解説授業がためになっている」または「少しためになっている」生徒の割合は94%（同88%）であった。見直しをしたり、その後の学習に取り入れている教科は数学、理科、英語が多い。テストの見直しによって学習活動におけるPDCAサイクルが確立している生徒が増えた。
学校評議員の意見	《互見授業・教科別授業研究会》 教員は常に授業に対する他者評価、自己評価、生徒による評価を生かし向上を図ってもらいたい。 コロナ禍にあつての質と量の確保に敬意を表する。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 見直し率が高くなっていることは、学力の向上に寄与しているものと考え。やらされている感から自主意識を持つ生徒が増えることに期待する。「なぜ間違えたのか」を習慣づけると社会に出たときに役に立つ。 自発的にPDCAサイクルを回す習慣を身につけられるようスケジュール管理を身につける機会を作してほしい	
次年度へ向けての課題	《互見授業・教科別授業研究会》 ・新学習指導要領が公示され、生徒の思考力、判断力、表現力を育てるための授業改善を続けていかねばならない。知識偏重にならないよう、ICT教材の利用やアクティブラーニングの手法の導入など生徒が主体的に授業に参加できる工夫をさらにすすめる必要がある。 ・教科横断を意識した授業展開をはかるためにも専門教科以外の授業見学を積極的に行う必要がある。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・生徒にテストの見直しを行なわせるためには「週末課題として課す」、「解説授業を行う」などの外発的な動機づけも必要である。生徒自ら課題を見つけ、自主的に学習計画を立てさせるために、担任や教科担当が、長期的な見直しを持って、段階毎に具体的なアドバイスを絶えず与えていく必要がある。	
評価基準	A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった	

令和2年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 2 －
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。 ②第一志望をあきらめず、難関大学への進学をめざす意識を育成する。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。大学などと連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。 ②自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。	
達成目標	① 大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合 大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 90%以上	②難関10大学+国公立医学部出願した生徒の割合 難関国立10大学と国公立医学部に就いた生徒の割合 … 50%以上
方策	○大学生活を具体的にイメージさせるために適切な時期に「大学探訪」を行い、卒業生を招いて座談会を開く。3月には大学受験を終えた直後の卒業生、既卒生を招き、「大学生（先輩）」に学ぶ会を行う。 ○将来の社会的・職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために1学年の生徒に対し進路講演会を行う。事前に希望を集約して要望の多い分野から講師を招き、15分野以上の分科会を設置し実施する。また生徒が具体的に進路を考えられるように、講師は生徒にとって身近な存在として、本校卒業生を主に依頼する。	○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また3学年では個別指導を強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。 ○SSH事業等を通し探究的な学習活動・体験の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。
達成度	・オンライン語る会 99.1% ・進路講演会 94.7%	・51.3% (出願141人/卒業予定275人) (参考 R元年度42.5% H31年度47.8%)
具体的な取組状況	<p>1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経済、心理学、報道、教育、理工、医学、薬学、国際等の分野から16分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・探究科学科で行う予定であった立山実習、能登臨海実習、「とやま賞」受賞講演への出席などは中止となった。県内企業・施設研修を行い進路意識を高めることができた。 ・国際人材育成と科学力養成を目的とするオーストラリア研修は中止となった。 ・実施時期を3月に変更した大学探訪は中止となった。 <p>2年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書面による学年懇談会（5月）を開催し大学入試の概要などを伝えた。 ・3月に予定していた大学探訪並びに企業訪問は、新型コロナウイルス感染症防止のため中止となった。代替事業として、東京大学在学中のOB・OGらによる「東大生とオンラインで語る会」を開催し、55名が参加した。 ・夏期休業期間を利用して富山大学で薬学実習を行った。 ・3月に卒業生を招いて「大学生（先輩）に学ぶ会」を予定している。 <p>3年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年次の基本理念である「鍛錬・自治・信愛」の伝統的精神を継承し、21世紀の日本を担う優れた知性、豊かな人間性を備えた生徒の育成を計るため、授業を大切にしてい、粘り強い学習を日々繰り返していくことを呼びかけた。 ・7月には大学別の学習ガイダンスを実施し、夏季休業中に取り組んでほしいものやそれぞれの大学合格までの学習プランを紹介し、個人面接を通じてどのように学習するか担任と計画を立てた。 ・進学模試や定期考査を通じて、PDCAサイクルでの学習を指導している。 ・7月と9月～11月の3か月に、各学習段階に応じた特別講座を開講し、学力の伸長を図るとともに、問題を通して各大学が求める学力水準を示した。 ・全教科にわたって、受験まで大学別添削指導を行っている。 	
評価	A	<p>《東大生とオンラインで語る会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒10名程度に東大生が2～3名つくという、大学探訪の際の「語る会」と同様の人数で行うことができ、双方向のやりとりもスムーズに行えた。 ・高校時代の学習法や大学での生活について、体験談を直接聴けたことに対する生徒の満足度は高かった。 ・情報教育部との連携で、必要な機器の購入や設置などが迅速に行えた。 <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野（16分野）の講師を招き、10月上旬に開催した。 ・将来を見据えた適切な文理選択につながるとともに、目標・進路が明確になり、学習意欲が向上した。
	B	<p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちが12月、1月と高い目標を掲げて学習に取り組んだ結果、目標は達成した。 ・共通テスト自己採点后に志望変更をした生徒が少なからずいた。
学校評議の意見	<p>《大学探訪・進路講演会》</p> <p>1年生における進路講演会は進路を考える上で有用である。OBの豊富な人材活用に期待する。コロナ禍においてオンラインを利用した「東大生と語る会」の満足度は大いに評価できる。今後も大学探訪に変わるものとして発展させてほしい。</p> <p>《進路の実現》</p> <p>コロナ禍の厳しい状況下で進路意識、学習意欲を高め、それぞれの希望の実現につなげてほしい。3年生前半で、目標大学で何をしたいのかという強いパッションを持たせ、テストの結果によって代替えすることなく、生徒の進路実現をしてほしい。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路意識の向上のためにはたいへん重要な行事である。新型コロナウイルス感染症の状況をふまえ、感染対策に配慮すれば実施が可能と判断されたら、行事を復活させたい。これまでの実施方法や内容は非常に充実したものであった。大学事務局や教授、OBとの連携、模擬授業や座談会の設定など、これまでのノウハウをしっかり引き継ぎたい。 <p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通テスト後に志望変更をした生徒が少なからずいたという現状を踏まえて、次のことが必要となる。 <ul style="list-style-type: none"> ①共通テスト対策が本格化する11月末までに、共通テストの結果に動揺することがない記述力の養成。 ②12月から1月にかけて行われた共通テスト対策の教材、学習プランの検証。 	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和2年度 富山中部高等学校アクションプラン - 3 -	
重点項目	読書指導・体力の向上
重点課題	①読書指導を充実させ、図書館利用の広報周知を行う。 ②体力の向上に努めさせる。
現状	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。
達成目標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数 広報活動12回以上、 読書の時間年間12時間以上(1・2年) ②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 70%以上
方策	○図書広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保し、探究型読書を実施する。また、年2回「読書会」を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行を通して図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深めさせる。 ○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	広報活動30回以上 読書の時間 1学年 普通科14時間 探究科学科14時間 2学年 普通科13時間 探究科学科16時間 2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 77.9%
具体的な取組状況	《読書・広報活動》 ・新入生に対して、休校明けの6月に図書館オリエンテーションを実施した。 ・図書委員作成の「図書案内」を年11回発行し教室に掲示した。司書作成の「新着図書案内」を月2～3回、職員室前と図書館前に掲示した。 ・1年と2年の教室前廊下に「ミニ図書館」としてマガジンラックを置き、新着図書を紹介した。 ・新企画として、図書委員による「本の福袋」を7月に作成した。予想以上に好評で、短期間で全ての福袋が貸し出された。 ・図書アンケート結果と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を12月に全生徒に配付した。 ・図書委員会の活動や感想文・感想画の優秀作品を紹介する図書館誌「富山中部図書館」を3学期に発行し、全生徒に配付する予定である。 《読書・読書運動》 ・LHの中に読書の時間を設定し、担任と生徒が同じ本と一緒に読む活動を行っている。 ・8月と12月に、1年は読書会、2年はビブリオバトルと意見文作成を行った。そのまとめを図書館誌で紹介する予定である。 ・毎年1学期に実施していた読書・教養講座は休校措置で実施することができなかったため、10月の文化祭で実施した。講師は世界史担当の本校教諭で、アイヌ民族と触れ合った体験話やアイヌに関する本の紹介などで、生徒を魅了した。 ・文化祭で、読書会の記録の掲示(1年)やビブリオバトルの決勝戦(2年)、図書委員による企画展示(図書クロスワード)などを行い、図書活動の活性化を図った。 《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した
評価	B 《読書指導》 ・全教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は例年並みである。 ・今年度の必読図書は概ね好評である。
	A 《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《読書・広報活動》 「本の福袋」(ジャンル別に2, 3冊を1つの袋に入れたもの)のような新しい企画が、生徒の新しい分野の本を読むきっかけになるよい企画だと考えられる。 読書の時間など必読の環境を作ってくれているのがありがたい。 各自興味のある分野を英語の原書で読ませるのもよいと考える。 《体力の向上》 厳しい大学受験を乗り切る最後の踏ん張りには、体力が必要だと考える。継続的に行って欲しい。
次年度に向けての課題	《広報活動・読書運動》 ・図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手にとってくれるような工夫を続けていく必要がある。 ・読書の時間の目的を再度確認し、本の選定を慎重に行う。《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和2年度 富山中部高等学校アクションプラン - 4 -		
重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。	
現状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的にも大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために、懸命に取り組んでいる。	
達成目標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 *大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート 80%以上	②部活動に充実感を得た生徒の割合 *3年生全員を対象にした、8月下旬のアンケート 70%以上
方策	○体育大会の競技や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技の練習や準備活動が行き過ぎないように、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	93.5%	97.0%
具体的な取組状況	<p>《体育大会》</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部員、各団の団役員生徒、教員との間で意見交換を積極的に行い、生徒主体の大会運営に努めた。 感染症予防対策を行い、例年とは大幅に内容を変更して実施した。 <p>《部活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化部、運動部とも感染症予防対策を行い、活動場所を工夫して行った。 例年の年間計画を変更し、感染症の広がりを見ながら活動を行った。 	
評価	A	《体育大会》 ・団役員生徒や生徒会執行部員らは、感染症対策をしっかりと立てて運営することに精力的に取り組み、体育大会を無事に開催することができた。
	A	《部活動》 ・各部の活動内容に合わせて感染症対策を工夫し、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。例年に比べ全国大会が少ない中、好成績を収めた生徒が多かった。
学校評議員の意見	<p>《体育大会》</p> <p>コロナ禍の中、感染対策を取りながら開催を決断し、無事終わられたことに敬意を表する。厳しい状況で、苦境でこそ発揮される力が加わって、学校が一丸となって成功に導いたものと思う。この経験を次につなげて欲しい。</p> <p>《部活動》</p> <p>様々な活動の制限の中、高い生徒の充実感を達成できたのは、部顧問の尽力によるものだと考える。生徒たちも知恵を出し合いよりよい活動を続けてきたことによる心の成長を期待する。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>《体育大会》</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の安全面および感染症や熱中症などの健康面に配慮し、競技種目内容の変更や全体練習の活動時間、活動場所などを検討する。 <p>《部活動》</p> <ul style="list-style-type: none"> 部活動をととして生徒が人間的に成長することを期待するとともに、活動時間の徹底、活動場所および部室等での清掃や感染症予防対策をより徹底して行う。 	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和2年度 富山中部高等学校アクションプラン -5-	
重点項目	「科学的思考力」と「自己発信力」の育成による「探究力」の伸長
重点課題	①探究活動を計画的に実施して、科学的思考力を高める。 ②さまざまな研修や学術交流を通して、自己発信力を高める。
現状	①これまで、探究科学科を中心に、野外実習や課題研究などのさまざまな探究活動を通して、科学的思考力の向上をはかってきたが、SSH指定校としてより計画的に「科学的思考力」を育成する必要がある。 ②海外研修などの研修・実習や学術交流に参加する生徒が増えている。
達成目標	①-1 野外実習、大学実習に対するそれぞれの目標達成度 *各実習事後に実施するアンケート ①-2 探究活動のルーブリックによる評価
	①-1 各90%以上 ①-2 レベル3に到達した生徒の割合 80%以上
方策	○野外実習や大学実習では、実習の内容や方法について十分に打合せを行ない、生徒が興味関心を抱き、積極的に参加できる工夫をする。 ○課題研究を探究活動と発表の2種類のルーブリックを用いた評価で探究力の伸長をはかる。大学等と連携して、探究活動を充実させる。
達成度	①-1 野外実習…実施できなかった 大学実習…科学的思考力がかなり向上29%、向上した71% ①-2 2月の最終評価でルーブリック評価の平均がレベル3に到達した生徒の割合…75% (理数科学科77%) (2学期末)
具体的な取組状況	《SSH事業》 ・野外実習は、今年度実施せず。 1年のSS基幹探究で、研修先の金沢大学環日本海域環境研究センターの協力を得て、臨海実習で行う研修内容の一部を代替する予定であった。 ・大学実習では、富山大学において2年普通科の希望者も含めて14名が2講座に分かれて3日間の薬学実習を行った。また、今年度は富山大学のご厚意により多くの研究室や施設見学を実施した。その成果を文化祭でポスター発表した。 ・2年探究科学科の課題研究では、富山大学の教官13名に指導を受けた。7月と11月にゼミ毎に研究内容についての指導、1月の発表会では研究についての評価をしてもらった。 ・探究活動の評価に当たっては、生徒によるセルフ・アセスメント、教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客観的な評価を心がけた。探究活動・発表の2種類のルーブリックを用いて評価を行い、評価の結果を面接などで生徒に還元し、生徒自身が次の目標を持つようにしている。
	《海外研修》 ・アメリカ研修は、今年度実施せず。 ・東北育才学校との交流は、今年度実施せず。 ・オーストラリア研修は、今年度実施せず。
評価	B 《SSH事業》 ・野外実習を実施できなかったため。 ・ルーブリックによる教員評価と同時に実施しているセルフ・アセスメントでは、生徒は高い自己評価をしており、探究力の伸長を実感していることがわかる。
	C 《海外研修》 ・すべての海外研修を実施できなかったため。
学校評議員の意見	《SSH事業》 実習的なものが実施できず、生徒たちは残念だったと思う。来年度に向けて代替プログラムを工夫する必要がある。ICTを活用したものが考えられないか。地元の大学との連携での活動は効果的だったと考える。
	《海外研修》 次年度も海外研修は困難と考えられる。オンラインを利用したバーチャル留学の短期体験など考えられないか。
次年度へ向けての課題	《SSH事業》 ・1年次のSS基幹探究では「探究モジュール」を取り入れ、しっかりとした基礎作りに取り組んでいる。2年次には大学教官の指導も受けて本格的な探究活動を行い、3年次の発展探究での英語による発信につなげている。3年間を見通し、一貫性ある効果的な指導体制や評価法について、さらに検討していく。 ・ルーブリックの評価基準を再考し、的確に生徒の活動を評価できるよう精選を図る。
	《海外研修》 ・海外研修中の実践的なコミュニケーションが円滑に進むように、事前研修を充実させることが必要である。 ・オーストラリア研修では自己発信力を高めるとともに、科学的思考力の向上のために研修内容を改善しており、その成果が期待できる。 ・参加者が研修で得た能力や体験を進んで今後の学校生活や将来に生かすことや、研修の成果を広く校内に伝えることが必要である。
評価基準	A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった